

歴史と文化

文化財 記念碑

カトリック築地教会聖堂 (中央区民文化財)

明石町5-26



カトリック築地教会は、明治初期に築地外国人居留地内で創建された教会です。関東大震災で旧聖堂が焼失したため、昭和2年(1927)に現在の聖堂が再建されました。ギリシア神殿を想起させるこの聖堂は、壁面をモルタル塗り仕上げた木造建築です。正面には重厚な6本のドリス式オーダー列柱が並び、切妻屋根の壁にはバラとユリのレリーフが施されており、外国人居留地の面影を今に伝える歴史的な建造物となっています。

指紋研究発祥の地

明石町8-1先



現在の明石町一帯には、明治元年から明治32年(1899)まで外国人居留地がありました。居留地18番に居住したイギリス人医療宣教師のヘンリー・フォールズは、大森貝塚の土器に残った古代人の指紋や指印を用いる日本の習慣を手がかりに、世界初の科学的な指紋研究を行いました。

浅野内匠頭邸跡 (東京都指定文化財)

明石町10-11



江戸時代に播磨国(現在の兵庫県)赤穂藩浅野家の上屋敷があった場所です。元禄14年(1701)に3代藩主・浅野内匠頭長矩は江戸城中で吉良上野介へ刃傷に及んで切腹を命ぜられました。翌年12月、本所・吉良邸に討ち入って主君の仇をなした浅野家旧臣(四十七士)の事件は有名です。

蘭学事始地 (東京都指定文化財)

明石町11先



江戸時代に豊前国(現在の大分県)中津藩奥平家の中屋敷があった場所です。中津藩医の前野良沢、若狭国(現在の福井県)小浜藩医の杉田玄白、蘭方医の中川淳庵・桂川甫周などが奥平家中屋敷に集まってオランダ語の解剖書「ターヘル・アナトミア」の解説を行いました。安永3年(1774)、苦心の末に「解体新書」と題した翻訳書を完成させました。この場所は、蘭学研究や日本の近代医学が芽生えるきっかけとなった場所です。

電信創業の地

明石町13-10先



明治2年(1869)に日本で初めて公衆電気通信(電報の取り扱い)業務を開始した記念碑です。開設時は、東京運上所内(伝信機役所)と横浜裁判所内との間に、約32キロメートルに及ぶ電信線を架設して電報の送受信を行いました。運上所跡は石碑から約40メートル南南東の辺りです。

築地小劇場跡

築地2-11-17



築地小劇場は、大正13年(1924)に日本初の新劇専用劇場(同名の劇団を付設)として開場しました。土方與志(演出家)・小山内薫(演出家・劇作家)を中心に設立した同劇場は、高い天井にドーム型の湾曲壁(クッペルホリゾンツ)、可動舞台や優れた照明設備を持つ新劇の拠点でした。